



建学の精神

日本聾話学校はキリスト教精神に基づいた聴覚主導の人間教育を行ない、自らの能力や個性を十分に生かし、自立して社会に役立つ人を育てます。

その教育方針は、以下の三つです。

- 1 キリスト教精神
- 2 聴覚主導の教育
- 3 早期教育

聴覚を通して日々の生きたことばのやりとり（対話）を重ねることは、ことばの獲得のみならず、コミュニケーション能力を高め、子供のよりよい全体的な成長発達を促します。

そのため、0歳児からの教育を行ない、ことばの獲得に最も大切な時期から、最適に調整された補聴器や人工内耳を使って、残された聴力を最大限に生かして学ぶことができます。



日本聾話学校 校章・マーク
信仰の盾、本は聖書をはじめとする最高の知識と教養、松明はマタイによる福音書 5章 14節「汝らは、世の光なり」に因り、使徒パウロの「愛は、徳をまっとうする帯なり」から、信仰も力も知識も愛の帯によって引き締められるという意味です。

学校法人 日本聾話学校

〒195-0063 東京都町田市野津田並木1942

TEL : 042-735-2361 FAX : 042-734-8292



創立

日本聾話学校は1920年(大正9)創立されました。創立のきっかけとなったのは、アメリカ長老派教会の宣教師として明治学院に赴任していたオーガスト・K・ライシャワー博士とヘレン・O・ライシャワー夫人の長女フェリシアが、熱病のために幼くして聴力を失ったことによります。ライシャワー夫妻は官立東京聾啞学校(現・筑波大学附属聴覚特別支援学校)の小西信八校長を訪ね、娘の教育について相談しました。当時の日本の聾学校での教育は手話法で行なわれていましたが、小西校長はライシャワー博士夫妻にアメリカに帰って口話法による教育を受けさせるよう助言しました。そして日本にも口話法の聾学校をつくってほしいと依頼しました。小西校長の助言と依頼を受けてヘレン夫人は3歳になったフェリシアを連れて帰国、シカゴの州立師範学校付属小学校の聾口話部に入学させ、ヘレン夫人自身も同校師範部で口話法による教育法を学びました。

フェリシアの名は、1964年(昭和39)に新設された母子教育施設(フェリシア館)に受け継がれています。

ライシャワー夫妻はこの教育法を日本に広めるために、聾教育の経験を持つ女性宣教師ロイス・F・クレマーとともに、1920年(大正9)4月、牛込福音教会において、日本で最初の口話法聾学校を開校しました。クレマーは、オハイオ州クリーブランドにあった市立のアレクサンダー・グラハム・ベル・スクールで6年間聾教育に従事、1917年(大正6)に福音教会宣教師として来日しました。

開校時の生徒は9人、教員は2人。その内の1人である幼稚部主任教諭 畑足子は、1922年(大正11)から2年間アメリカのクラーク聾学校師範部へ留学し、口話法聾教育を学びました。アメリカから導入した口話法による教育実践は、1925年(大正14)西川吉之助・橋村徳一・川本宇之介によって設立された(日本聾口話普及会)の活動と並び、戦前の日本の聾教育に大きな影響を与えました。1944年(昭和19)には財団法人聾話学校として認可され、口話法の実践を、校名に「話」の字を用いることで一層明らかにしました。



創立者夫妻 Hellen & August Karl Reischauer
長女フェリシアの聴覚障害をきっかけに、
口話法による教育を日本に広めました。



創立の背景と歴史

第二次世界大戦が終わり、1948年(昭和23)戦争で帰国していたクレマーが日本に帰任。アメリカ政府が軍占領地の疾病や飢餓による社会不安を防止し、占領行政の円滑化を図るため陸軍省の軍事予算から支出した援助資金であるガリオア資金(GARIOA: Government Appropriation for Relief in Occupied Area 占領地域救済政府資金)を受け、大嶋功副校長が3カ月にわたってアメリカの聾教育の視察に出かけています。大嶋は1951年(昭和26)から1995年(平成7)までの長きにわたりリーダーシップを発揮し、補聴器の活用と早期教育に取り組み、日本の聾教育におけるパイオニア的役割を担いました。人工内耳を装着した教育の場の一つとしても注目されています。

聴覚に障害を持って生まれた幼児は、音声言語の獲得が困難になります。聴覚を通して、話し言葉によるコミュニケーションの楽しさ・大切さに目覚め、人格を形成していくためには、障害をいち早く発見し、早期に教育を始めることが非常に大切です。乳幼児期の親と子供の豊かで安定したかかわり合いが、その後の子供の発達の基礎となります。そのため、日本聾話学校では1951年(昭和26)に3歳児クラス、1960年(昭和35)に2歳児クラス、1967年(昭和42)からは0歳児からの未就学聴覚障害児とその親への育児助言、サポートを始め、1977年(昭和52)からは「乳幼児部」として0歳からの難聴幼児通園施設「ライシャワ・クレマ学園」を併設しています(日本聾話学校ではライシャワ、クレマの表記で統一しています)。

また創立当初から「母の集り」、1年後には「パーレンツミーティング」という集会が礼拝形式でもたれました。1922年(大正11)10月8日からは毎日曜日午後12時に生徒対象に日曜学校が開かれ、1926年(大正15)東京府荏原郡松沢村上北沢(現・東京都世田谷区上北沢)に移転した後も引き続いて行なわれました。

上北沢に堂々とした校舎ができたものの、1930年(昭和5)年に村上求馬校長の退職と、口話法が公立聾学校に普及したことなどで生徒に退転校が多くなったことが重なり、経営的に危機が訪れます。しかし、その後も長く同校を支えることになる大嶋功が1931年(昭和6)に、翌年に望月敏彦が相次いで就任し、立て直されました。

特記すべきは同窓会の活動です。日本聾話学校の同窓会は定期的に集会を持ち、積極的に活動していたため、他校出身者も参加するようになりました。戦後の民主主義にも励まされ、ろう者の教会をつくりたいという希望が起り、1948年(昭和23)6月27日より大嶋の属する中渋谷教会で毎月第四日曜日午後2時から集会が持たれました。まだろう者の交流機会も少なかった時代で毎回30～40人の出席者がありました。礼拝後は聖書研究会も行なわれ、のちにクレマーの所属する目白教会に会場を移し、〈ろう者の教会〉として続けられました。1957年(昭和32)8月には母校発祥の地、東京都新宿区矢来町の牛込福音教会跡に移り、伝道所から正規のエバク教会となっています。

町田市に移転した現在もキリスト教精神に基づき、教育オーロロディー(聴覚学)による補聴環境の徹底を図りながら、耳を活用した「対話」による教育を展開しています。